

地球時代の選択肢

アフリカに移住した家族

吉村 峰子 (南アフリカ・ダーバン在)



第57回

コロナから生還しました

2020年12月、新型コロナを重症化させて訪問先のケープタウンで入院し、ICU(集中治療室)で治療を受けておりました。でも、幸運なことに、無事生還して2021年元旦に自宅に戻りました。

入院中は、酸素飽和度が70%台まで下がり結構重篤な状態でした。今回は、11月23日に出産したばかりの娘の手助けにいったのに、娘婿にコロナを移し、娘は生後3週間の乳児を抱えて危篤の母、陽性隔離の夫、どれだけ不安だったか。役に立つどころかとんでもないお荷物になってしまい、ただただ申し訳ない思いでした。でも、幸いなことに娘と孫は感染させずに済みました。



LifeVincent Pailotti Hospital (病院 HP より)

私がお世話になったのは、ケープタウンの設備の整った民間病院で、High Care→ICU→High Careと病状に応じて病室を移動しました。医師のギリギリの判断で、人工呼吸器のお世話になることなく、高濃度酸素治療が功を奏したようです。南アでもここ一年で、新型コロナの治療方法が改善され、人工呼吸器を使用することはよいよ最後の手段という認識ができています。

もうひとつ幸運だったのは、私が発症した12月の始めは、まだ病院にゆとりがあり、検査結果で陽性反応が出て即入院が可能でした。ただ、11日間の入院の最後の方は、病院の病床が一杯になり、たとえ陽性だったとしても、入院を断られる患者さんもいたようです。

さて、入院中、ICUで治療を受けていた本人は、医師が家族に危篤状態を伝えていたことも知らず、「これから48時間が勝負」と言われていた日に、取引先と来年の仕事の調整までしていた、という本当に不思議な病状でした。酸素飽和度が70台後半まで下がっていたのに本人は呼吸が苦しいとも意識していませんでした。

どうもこれは、「幸せな低酸素状態—Happy Hypoxia」と呼ばれる病状で、本人は自分が重篤な状態でも脳がそういう状態を意識させていない、という可能性もあるらしいです。新型コロナで急死される方が多いのは、こういった状態で医療機関で治療を受けていなかったら、自分がかかなり危険な状態にあることさえ知らず亡くなってしまいうからかもしれません。

私の友人やSNSで知り合った方々からたくさんのメッセージをいただきました。南アの病院ですので、それほど規則は厳しくなく、ICUの中でもスマホの使用は許されていました。意識がはっきりしていた時にどれほど嬉しく読ませていただいたか。

ICUでの思い出はいろいろあるのですが、一つは私の動脈も静脈も血管が非常に分かりにくく、看護師さんたちが汗をかいてがんばってくれたのですが、なかなか成功せず、注射針を何十回も刺されてかなり痛い思いをしました。

また、病院全体もかなり混乱していて、朝食が10時過ぎになったり、娘やケープタウンの知人から届けてもらった差し入れが12時間以上迷子になったりしました。が、どれだけ病院が混乱していたかがよく分かるので、私の今回の経験だけでこの病院を非難しようとは思いません。

ICUにいて、心掛けたのは、看護師さんたちにとにかく「Thank you」と、感謝の気持ちを伝えることです。体を拭いてもらう、薬を飲ませてもらう、血圧や酸素飽和度の検査をしてもらうたびに「ありがとう」と伝えていました。彼らへの感謝の気持ちはもちろんなのですが、南アではこういう風に自己アピールを上手にしないと忘れられてしまうことが多いのです。

そして、一番重要だったのは、高酸素治療を鼻から吸引していたのですが、これは水分も一緒に鼻にいれないと、ものすごい圧力で酸素が入られるので、水分が切れた途端、鼻の奥に激痛が走るのです。まあ、例えば日本であれば、こういった水分の点滴などを切らず、ということはないと思うのですが、南アでは起こってしまうのです。そこで、自分で水分が無くなる時間の感覚をつかんで、早め早めに看護師さんたちに「もうすぐ無くなると思うよ～」とサインを送ることを怠りませんでした。

あと、ICUでの思い出？は、なんとICUの病室内にハエが侵入してくるので、そのハエをいかに捕まえるか、ということにもエネルギーを使っていました。いろいろな点滴に繋がれてベッドに横になっているので、そう体が自由にはなりません。で、いろいろ試した中たどり着いたのは、低血糖になった時用のプロテイン飲料を少し残しておいて、そのドリンクの中にハエをおびき寄せる、という戦略でした。毎晩、最低でも2匹はこのプロテインドリンクのアリジゴクに入っていました。

入院中、もちろん不満なこともあったのですが、気持ちをそれで落ち込ませるのは不本意なので、態度が悪かったり、注射が本当に下手な看護師さんに当たった時は、想像上のカンペキな看護師さんにその隣にずっと来ていただいて、慰めてもらっていました。「すぐ終わりますよ」って。

ICUで一番辛かったのは、私と同時期にICUにいた患者さんのことです。一日中、さめざめと泣くのです。早く家に帰りたいと。彼女が、「私の娘はお酒が切れなくて、孫娘がちゃんとお飯をもらっているかが心配なのよ」と泣くのを聞いて、自分の病状だけでなく、子どもたち、孫たちのことを心配するのはなんと切ないことなんだろうと思いました。何の力にもなれない自分が歯がゆかったです。



さて、退院して間もなく2か月半になりますが、後遺症としては、視力、体力、手足の動かし方、記憶力に衰えを感じます。ケープタウンにいた1か月、ほとんど寝ていたので、筋肉がごっそり落ち、歩くことさえ困難でした。たかだか2時間ほどのケープタウン→ダーバンの飛行機での移動で疲労困憊しました。

ダーバンに戻ってから、知人・友人の家族や友人と言った、実際によく知っている人たちのコロナでの訃報が毎日届くようになりました。自分がいかに幸運だったかを改めて実感しております。家族、友人たちに支えられて生き延びました。

生かされた、という思いでいっぱいですが、ゆっくりと体調を整えながら、これからもがんばっていきたくて思っております。